

試験研究機関ネットワーク 構築への思い

財団法人 大阪科学技術センター
ATAC運営委員長 梶原 孝生

冬になると東京のビル街を越えて丹沢山塊の上にクッキリと純白の富士山を仰ぐことができる筑波。ここに数十年前、学研都市が誕生したときには、荒涼とした西部劇の街を思わせていました。

しかし、年月が経つに従い、街路樹も美しい街並みが育ち、筑波大と官公の研究部門を中心とした、まさしく学研都市が出来上がってきた感があります。歩道を散歩すると、そのしっとりとした風情は、シリコンバレーのエルカミノ通りを思わせます。

今や筑波が日本を代表する学研都市であることを疑うものは居ないでしょう。

しかし、知られていないのは実は阪神南地区です。尼崎、西宮にはなんと筑波に次いでのが国第2位の企業の試験・研究機関が存在するのです。筑波が官主導の試験・研究機関と言えるならば、尼崎、西宮のそれはまさしく民主導のものとの対比できるでしょう。

筑波に次ぐわが国2位のこれら試験・研究機関が、阪神南地区の産業を支える役割を担っていることは残念ながら余り知られていません。ここで活躍する当事者たちでさえ、この認識が殆どないのが現状でしょう。この豊富な試験・研究機関をもっともっと有効に活用し、また、これらがネットワークを組んで活用を工夫すれば地区の産業活性化にも勢いをつけられるし、ひいてはわが国の産業振興にも役立つ筈です。

この阪神南地区の試験・研究機関の活用を、もっと大きな声でPRし、ネットワーク化して有効に機能させる努力が必要なおきではないでしょうか。

近年の社会経済の変化に対応して、新しい製品や製造工程などの研究開発は、台頭する

近隣諸国の攻勢に対抗する上でも益々重要になってきています。これからの製造業、地域産業の発展のためには、一企業だけの研究開発では限界があるのは明白で、各企業の連携や、大学、公的機関との連携を含めて新しい発展の方向を模索する必要性は極めて高くなっていると言えるでしょう。そのためには、これらのネットワーク化が有効な手段となります。

たまたま兵庫県阪神南地区民局にこれらの意図を理解して頂き、一昨年、阪神南地区の試験・研究機関の調査プロジェクトをスタートさせ、我々ATACにその実施を委託して頂きました。

一昨年は基礎調査としてウェブサイトや公開資料を基にして西宮、尼崎地区の主として製造業の試験・研究機関の基礎調査を行いました。さらに昨年は、西宮、尼崎の両商工会議所などにも協力を仰ぎ、一昨年の基礎調査資料をもとにして、各企業を訪問し、実際のネットワーク化へのそれぞれのご意向などを聴取してきました。この結果は、おそらく(財)尼崎地域・産業活性化機構のホームページに公表されるでしょう。

また、この聴取をもとにして、ネットワーク化への動きも始まったところです。各企業が試験装置を共同で購入したり、相互に利用したり、更にお互いの信頼されたネットワークを組んでのシナジー効果を発揮して新たな製品開発に繋がれば我々の努力も報われます。

皆様も大きな期待の眼を持って見守って下さい。これが成功すれば、さらにその輪を、東大阪や堺、八尾などにも拡げて行きたいと願っております。